

---

# めりくり。熊原と佐鳥さん

dalmabowz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

めりくり。熊原と佐鳥さん

### 【Nコード】

N5531P

### 【作者名】

dalmabowz

### 【あらすじ】

クリスマスだったのに俺が不幸なのは会社のせい？そうかもしれない。でも一番の不幸は、可愛い？ストーカーのせいだと思う。ヤメロ。ちかづくな。潤んだ瞳で見つめるな！

## じんぐるべる

世の中はじんぐるじんぐると朝から騒々しい。

どんよりとした空は水を吸った綿雲が広がっている。もしかしたら雪になる手前かもな。

そんな、どこか寒々しい街の景色だったが、灰色のビルに緑と赤と白が入り混じり、普段とは印象が変わっている。

いつ剪定したのか定かではない枯れ木の様な街路樹にも、電飾の帯がぐるぐる巻き付けられ光る。

無理やり幸せを演出している様なその光景を、俺は案外嫌いじゃない。

幸せなんて主観でどうにでもなる話だと思っているからだ。

餓死者が出る海外の貧しさ。抵抗も出来ず暴力を振るわれる子供達。そんな命にかかわるレベルに比べれば、俺の環境は楽園と言ってもいいはずなのだ。

「そついう事だな」

薄手のスプリングコートでは防げない寒風にやせ我慢をして、しもやけ一歩手前の指で紙を受け取る。

俺は駅前のチラシ配りから渡された漫画喫茶の割引券をポケットに突っ込み、ボロビルの3階にある会社に出勤しようとタイルが剥げた壁の階段を上がった。

……そんでもって俺はその直後会社をクビになった。なのでさっきのお気楽な台詞は撤回する。

正確には社長が夜逃げした。年末決裁の手形が不渡りを出したの

だ。

まあ、ブラック企業だという噂だったのでいずれはこうなったのかもしれない。

しかし沈没する船から逃げ遅れたネズミにとって、その行く先が暗澹たるものだってことは、わかってくれるよな？

がたつく会社のドアを開けると、さして大きくも無い事務所の中は、怖いお兄さん方で一杯だった。

結構ヤバイ先からも借金していたらしく、金庫はもちろん会社の機器や什器も差し押さえられて、何も持ち出せない。

書類棚から机の引き出しまで開けられた社内には、書類やコピーが乱雑に広がる。白い紙が床を覆う様は間の抜けた雪景色だ。

突然の不幸な現実が理解できず、茫然とした俺達社員をふいに彼等が見回す。

その視線から逃れるべく、俺が目立たぬよう顔を背ける中、可哀想に一人の社員が彼等の目に止まった。

オールバックのインテリ系が顎をしゃくると、舎弟のゴツイ禿頭がそちらへと歩き出す。

要領の悪い馬鹿は後ずさりながら派手に首を横へ向けるがもうどうしようもない。

まあ、運が悪かったな。俺はそいつに同情した。

坊主のアンちゃんはそのいつに近づき、背に回した腕で、コートの襟ごと首をつかんで凄む。

「おまえ！社長の居所知らんのけ？」

……他人のふりで現実逃避しても俺だよな。

首をぶるぶる全力で振り回そうにも、半端ない握力のせいで俺の首は満足に動けない。するとアンちゃんはいつと顔を近づけてきやがった。

うわお、緊急事態！顔面接触まであと1センチしかねえ。いや、10ミリある。いやいやまだ100マイクロもある。蛇に睨まれた蛙の俺は、認識上の距離を少しでも離れたくて、単位をゼロの桁が多い方へ換算する。

「知り、ません」

必死にそれだけを伝える俺の目じりには、すでに湿った物が浮かんでいたはずだ。鼻もツンとするし。なのにアンちゃんは昨日の夕飯に餃子とレバニラ炒めを食べ、歯磨きをさぼったに違いはない息を吹きかけ、節の大きい指で頸動脈をゆっくり絞りながら念を押してくる。

「嘘やったら、テトラポットの材料に混ぜるけーの？」

俺は地獄の釜の様な口臭と、天国が見える落とし技に意識を失いかけながら、張子の虎の如くかくんかくんとうなずくのが精一杯だった。



せいじゃがまちにやってくる

しばらく俺は気絶していた様だ。目覚めると接客用の古い長椅子に寝ていた。

なんでわかるかと言うと、後頭部に感じる破れた座面と体を横にできるサイズの椅子がそれだけだから。あと顔の上半分には水を絞ったハンドタオルらしい布を当てられている。

あー違うな。これって給湯室の急須磨き用の布きんだろ。しかも茶渋の匂いが染み付いて、洗濯しても落ちないって先週雑巾に格下げされたヤツな。濡れてるくせにどこかケバ立った感じからそれは間違いない。

どうでもいい事を分析しつつ、俺は周辺の物音に耳を澄ます。せっかく気絶して攻撃対象から外れたのに、ノコノコと戦線復帰するつもりはないからだ。

その時隣で動く気配を感じた。

俺は布きんがなるべく動かぬよう下の顔だけを器用にずらし、接客テーブルの方を向く。布の下から薄く眼を開けると向かい側の椅子に誰かが座っているようだ。

じつと眼を凝らして焦点を合わせると、低めのテーブル板の地平線から黒くて丸い山の様なものが二つ。どうやら膝小僧が半分だけ見えているらしい。その上には膝上のスカートと細いウエストのシヤツが続いていたが、俺の視線は雑巾に遮られそれ以上は確認できなかった。

そこで会社で黒のタイツ&膝上スカートの人物を脳内検索。その

結果気絶した振り続行の判断を下したが、そうは問屋がおりさない。

「熊原先輩。大丈夫ですか？」

俺の動きに気づき、椅子に座る人物はピアノの和音の響きに似た心地よい声をかけてくる。

だが違う、コイツはずっと俺を監視していただけだ。

それこそ一挙手一投足を秒間100万フレームの超高速撮影カメラにも負けないほどの集中力で。このカメラは銃弾が林檎を貫く瞬間だって静止して見える。

俺が止めてほしいのはコイツの行動だが。まあ、それでも額を布で冷やすぐらいは知っていたんだな。 雑巾だけだな。

「ああ、佐鳥さん」

俺は小さな声で答えると、質問をする。

「状況は？」

「組関係者は現金が見つからず、転売可能なアイテムを強奪し撤収しました。社員の大半は自宅へ帰還、残りは事後対応の為に協議しています」

佐鳥さんはどこか楽しそうに報告をしてくれた。

俺は、これは現実ですよー、君の好きなオンラインゲームの突発イベントじゃないですよーと突っ込みたいが、その台詞が過去にこのストーカーのスイッチを入れた事を思い出し、ぶるりと震える。

顔の雑巾……ああ、そうだよ雑巾だよ、を取っ払うと、体を起こ



して両手を額で前で組む。視線はテーブル付近。もちろんストーリーの顔を見ないで済む様にだ。そして違う話を振った。

「じゃあ、給料とかは無理だね」

「そうですね。リーダーが資産持ち逃げでばつくれたら、ギルドも大抵解散ですしね」

いや、会社はギルド違うし。でも、佐鳥さんの言う通りこの会社は終わったと俺も思う。なにしろ社長の人脈で仕事を貰って、自転車操業で回してきたのだ。

10人の零細企業で安月給でも、そんなだけの人間を食わしてきた社長は大したもんだと思う。もちろん思うだけで許せるわけはねーけどな。せめて今月の給料払ってから雲隠れしろっての。

とにかく、再就職先を探さないとなあ。ボーナスは期待してなかったが今月の給料まで無いのはキツイ。貯金もそろそろ底が見えている。だけど失業保険あてにしていると一気に生活保護まで行っちゃいそうだしな。

「働いたら負け」という悟りを開いていない俺としては、正社員の安心感は捨てたくないわけ。ま、正社員でも一寸先は闇な現状みると、安心なんて幻想だけだな。だけど幻想をぶち壊して不羈独立を誇る勇氣はないんだ。

まったく、この年の瀬になんてこった。

俺が落ち込んでいると、佐鳥さんはなぜかもしもじとしながら話しかけてきた。顔は見えねーが、視界に入ったスカートの上で細く

綺麗な指を捻くりまわしている仕草をいい意味で表現するとそうなる。

俺って善人だな。

## そりすべり

「それで先輩はどうされるんですか？」

「まあ、再就職先を探さないかね」

俺はそこで気づいた。このチャンスにこのストーカーと離れるんだ！実家から追い出されて、今は漫喫暮らしの俺なら、会社という接点が無ければこれ以上追いかけてこれないはずだ。

ヒーハー！やったぜ！社長良くやった！腹は立つが許してやってもいい気分になってきた。

「大丈夫です。私がRMTで食べさせてあげます」

内心テンションの上がった俺を冬の滝つばに落とし込む様に、佐鳥さんは熱のこもった声でささやく。確かに佐鳥さんは、ゲームアイテムを現実のお金で売買するRMTの裏世界ではそれなりの存在らしい。レアアイテムで月200万の稼ぎだそうだ。警察に捕まれないのかと聞いたら、ニヤニヤ笑うので怖くてこれ以上は聞けなかったが。

「その代わり、内助の功をお願いしますね」

おい！勝手に話進めるなっつての。ぜってえ嫌だ。なんで俺が料理、洗濯、掃除なんてしなくちゃならねーんだよ。

「私が風邪で寝込んだ時、アパートに来てご飯作ってくれたじゃないですか。料理スキルカンストしたキャラ並みに美味しかったな」

つきたての餅のような肌と、桃のような薄紅色の頬に手を当て俺をお褒めを頂く誰かさん。虐殺スキルを上限までカウント・ストップ、超暴虐キャラを操ってるんだと自慢してたな。

くっそ。あれは社内デスマーチ進行中にシステムエンジニアではエースのお前が倒れて、仕事の納期がマジヤバになったから早く回復させろという社長命令で元氣付けに行っただけだ。

そこで見た廃ゲーマーの余りに酷い部屋の惨状に、ちょっと同情して飯を作っただけだ。それ以来餌付けされた狼みたいに近寄って来やがって。こええっての。

「いや、ちゃんと仕事探すつもりだよ」

きっぱり言い切る俺に、佐鳥さんは残念そうに手を下ろす。

ネイルアートもしてない透明のマニキュアを透過した桜色の貝がらが十枚。なんでこんなに爪整ってるんだか。

「そついうわけで帰るから」

永遠にサヨウナラ、と内心で挨拶しながらさっさと立ち上がった俺に、向かいのソファへ腰掛たまま、佐鳥さんは聞き捨てならんつぶやきをもらす。

「残念です。熊原先輩にも退職金を渡そうかと思っていたんですが」

「……あいつらが銀行口座からここの金庫までさらっていったんじゃないのか？」

一応声を潜めつつ話す俺の怪訝な顔がおかしかったのか、グロースに艶めく唇が笑みを形作った。

「内緒ですけど、聞きたいですか？」

俺はストーカーの交渉術にはまるのが悔しいので黙っている。相手も沈黙のまま可愛い膝の上で手の平をぽんぽんと交互に叩いてリズムを取っている。

その間隔は多分きつちり一秒だ。クイズ番組の残り時間ばく焦燥感をつのらせる音に、俺は十三回目で降参した。

「ああ」

心から嫌そうな俺の返事にもかかわらず、佐鳥さんは、嬉しそうに腰を上げて手招きをする。もっと近くに来いという事か。やなこった。

ストーカーに接近する馬鹿はいないだろうが。こら、両手で招くな。

「そこで話せよ」

「やです」

俺の言葉を見殺しして、二人を隔てるテーブルにすりとした両脚を乗せて立つ。

「まて、普通障害物を回り込むだろ」

俺がチートっぽい行動を批判すると、両手を腰にあげて踏ん返り返りやがった。

「攻撃型戦士でも、レベルが高ければ地形効果の影響は軽減できる

のです」

「何のレベルだよ」

「A&Iです」

「Ability（能力）とIntelligence（知識）か？」

「またまた。先輩たら」

笑み深くハートを左胸の前で形作る自称？愛の戦士。それなら俺は、退職金という楔で処刑場の階段に打ち付けられた哀の囚人だぜ。

そして俺の金銭事情に生殺与奪の権利を握った戦士は、腰の手を横に広げ体をひねると、竹とんぼように螺旋回転で長椅子の座面に向けて跳んだ。

佐鳥さんはぐるぐるまわりながら上昇し、その直後墜落。それはただでさえ古く壊れかけの椅子には致命的だったらしい。

錆びたスプリングにトドメの一撃を食らわせ、怪鳥は五輪体操競技で金メダルの日本代表並みに、ぴったりとした姿勢で着地した。俺のすぐ隣に。五センチぐらいの距離に。ふわりと上がった髪がもとにもどる途中、俺の肩をなでる。

床の上の俺と椅子の佐鳥さんは元々身長差が結構あるので、俺は普段ストーカーの熱視線を軽くスルー出来る。

だが今回は視線が一瞬だけ釣り合ってしまった。

黒目が大きく、すこしハシバミ色の混ざった瞳力は、刹那の交錯でも物理的圧力を感じさせる。

いづれいづれ。ああ、本気でいづれあ。

すてきなほりでい

「こつち見んな」

俺が素早く横を向く流れの中で、顔を寄せる相手がちろりと舌を出して上唇をなめるのが見えた。

「前みたいに耳たぶなめたら殴る」

すかさず放った俺の警告にショックを受けたのか、がっくりと肩をおとす佐鳥さん。

やっぱやる気だったな？

しかし精神的回復力が魔王クラスの佐鳥さんは、すぐに気を取り直したらしく俺の耳に朱鷺色の口を寄せると、肝心の話を始めた。

「えっと、まあこのギルドの先行きについては私も懸念していたので」

だからギルド違う。あー。サツキの蜜みたいな香りの息を吹きかけんな、さらさら指の腹で髪の毛の根本の肌をなでるな。俺はわめき出したいが逆に調子に乗せるのでぐっと我慢する。

「二年ほど前から経理・財務ソフトに保険をかけました」

えへへと罪無き子羊の顔でコイツが言うのは、社長に黙って二重帳簿を作ったという事だった。

「四力国使って洗濯済みですからいつでも引き出せますよ！ やり方はですねっ」



「いくら貯まつてる?」

不正貯蓄&マネーロンダリングの仕組みについての熱弁をばさりと切り捨て、俺は一等重要な点を確認した。

「内緒ですけど、知りたいですか?」

「知りたくねーけど、話したければ聞いてやる」

俺は今度こそタフネゴシエーターになる。そう簡単に言いなりにならないぜ。

洒落た街路の両側にはセレクトショップや女性に人気のブランド店が建ち並んでいる。どのウィンドウもクリスマス飾りであふれ、人びとの表情も愉しげだ。

その間のオープンカフェは外にかかわらず冬でも席が埋まるほどの人気だった。パラソル型のストープで客席を暖めているので見た目ほどは寒くないのだ。

そのテーブルの一つにぐったりと疲れきった俺がいた。

テーブル上にはコーヒークップとラッピングで派手になった紙袋や箱が入ったショッピングバッグ。もちろん俺の物じゃねえ。

「先輩とデートなんて夢みたいですよ」

隣でホットチョコレートのマグを両手で持ち、やけどしないようにちびちびとする佐鳥さん。

冷たい外気で新雪の肌に可愛く鎮座する鼻の先がほんわかと赤くなっている。

サーモンピンクのコート包まれた、苺のショートケーキの様なかんばせ。俺は周囲のバカ共がだらしくもチラチラ見ているのがわかった。

おい、お前ら。自分達の彼女がめっちゃ不機嫌そうな事に気づけよ。

「で、退職金の話だが」

俺は何度もこの話を振ってはかわされる事を繰り返しながら、すでに店を何軒か付き合わされていた。

「周りから見たら絶対恋人同士ですよね」

「聞け」

そっちネタには絶対行かんと顔をしかめる俺に、佐鳥さんはやつと諦めたのか、渋々話し出した。

「足跡消すために、タックスヘイブンの国を経由しながら色々誤魔化つつ分散処理したので、為替レートの影響は受けましたが、現時点でUSドルで100万。ユーロでも同じく100万」

佐鳥さんの告げる金額の単位がすぐには頭に入ってこない。えつと今1ドルが83円で、1ユーロが110円ぐらいだから……

「日本円では2億円弱ですね」

俺の知りたい事をさらりと追加する。つーか最初からそう言えよ。

俺が驚かなかったので、佐鳥さんはなんだから不満そうに顔を膨らませている。

いや、2億円なんて逆に現実感がないぞ。宝くじ並みだろう……だがちよつと待て。

「それ嘘だろ？」

俺はコーヒーを一口飲んで冷静に告げる。だってそうだろ？あんな零細企業から2年足らずで2億も抜くなんて。売上なら粉飾でやれない事はないが、利益は無理に決まってる。

給料の遅配が毎月心配だったほど会社の運転資金は困窮してたつてのに。

「あそこじゃ無理だな」

俺はそう結論付ける。佐鳥さんは俺が信じないのが大層不満らしく、足を椅子の上に組んで黙り込んだ。周りのバカ共のどよめきと隠された興奮が伝わってくる。

おい、スカート、スカート。見たくもねえのに見えちゃうだろが。

俺が外の雑踏へ顔をそらしたまま下を指差した事で、指摘したい点に気づいたらしい。なんでか知らんが嬉しそうに座りなおし、機嫌を直して説明しだした。

「子会社のペーパーカンパニー作って、海外で株式化して欺瞞情報流してファンドで金あつめて中国先物に投資して売り逃げて、後始末はババ引いた頭の悪い邦銀になすりつけました」

えーと、どこのアングラ経済工学グループの話かな？

片手間なのであんまり派手にできなかったんです、と相手は殊勝な態度だが、そんな事はどうでもいい。

「マジ？」

俺がまだ半信半疑の状態で聞くと、佐鳥さんはベニスの商人も逃げ出す笑顔で答える。

「金融工学の果実、いらないんですか？」

もちろん、金は欲しい。だが経済工学やら金融工学という名前からはいかにも学問ばいが、内実は博打に近い先物買いのおかげで、皆が最後に負け組にならない様必死でババ抜きをしてただけじゃねえか。

そんな犠牲の上に成り立った錬金術で作った金ってどうなんだ。

しかもそのとばっちりが昨今の世界的大不況の引き金で回りまわって仕事をなくしたと思うと、俺はなんか複雑だった。

佐鳥さんは背をまるめ、すこし醒めたチヨコの表面をチロリチロリと仔猫みたいになめながら続ける。

「SEの加藤さんは交通事故で賠償金払っているの、子供さんが二人とも大学受験ですけど、学費が高くて志望校諦めるしかないらしいです。」

営業の鈴木さんは奥さん長期入院ですが手術費が高くてこのままだと退院は無理だそうです。

総務の高橋さんは耐震偽装で引っ越すしかなかったマンションと今の分ローン二重払いで生活費はサラ金に手を出すしかないそうです。それから……」

佐鳥さんは、潰れた会社の同僚の苦境を事務的に報告し続ける。

こんなブラック企業に勤める奴らが、勝ち組なわけではない。正直言って他人の荷物を背負う程の余裕は無いメンバーだ。それでも愚痴を言い合い、時にはわめき合って、なんとか会社と人生回してきただ。

3年間俺の居場所を作ってくれた仲間でもあった。

かつこ悪いからそんな事ぜってえ言わねーけどな。

ふいにブラックオニキスの黒光を宿し、錬金術師は俺を見上げる。

「れっきとした経済活動による収入を、子供じみた独善でどぶに捨てるんですか」

いや、遵法精神は別に独善じゃないと思うが。それに何がれっきとした経済活動なもんか。お前のやり方は違法か、良くて脱法行為だろが。

全てをグレーに塗り潰した手すりもない一本橋で、ダークサイドの谷を渡ったに違いないくせに。

佐鳥さんの批判の言葉より、氷水の視線から眼をそらす。カップの残りを乾しながら、俺は結局こう答える。

「きつちり10等分しろよ」

それを聞いた錬金術師は、イルミネーションもかすむほどの輝きで大きくうなずいた。

ああ、そうか。佐鳥さんも仲間を大切に思っていたんだな。まあ、そうりゃそうか。大概お世話になったはずだしな。

それでも俺には厄介なストーカーだけだな。

## きよしのよる

名誉大佐の店でクリスマス用チキンパックを買い、地元のケーキ屋でホールサイズを買った佐鳥さんは、さっきの買い物も含め、何もかもを自分で持とうとしてふらついている。

自分で持つと言ってきかないのだ。

街はそろそろ夕方で、暗くなるほど電飾が映えて美しい。俺と佐鳥さんは交渉の結果、一足早く一緒にクリスマスパーティーをする事で妥協したのだった。

「かせて」

見かねた俺が再び荷物へ手を出すと、なんとまたもや断ってきやがった。

「私がご招待するのに、お客様にはそんなご迷惑はかけられません」

「ほほう。今までの俺にかけ続けてきたご迷惑はどうなんだ？」

げんなりしながら過去の所業についてチクリと突くが、今の佐鳥さんには全く通じない。やっぱりこれは私の役目ですし、と溢れそうな紙袋を抱きかかえる。

「なあ、アパートじゃなく、どこかのファミレスで食事ってことじゃだめか？」

俺はあの魔窟に再び行くのが嫌で、再交渉を試みる。それに対する返事はこうだ。

「今日のイブイブナイトは、ギルメン達とめりくり祭りの予定だったんです。だから、部屋じゃないとボーイチャとか色々困るんで」

あーそう。オンラインゲーム上でのクリスマスイベントはもはや常識だが、こいつのはまり方は俺からみても半端ない。きっとギルドメンバーと音声チャットを楽しんで、レアアイテムのプレゼントとかするんだろう。

「忙しいなら、別に無理にパーティしなくてもいいんだけど」

佐鳥さんのネットゲライフの充実に水を差したくない、というかわりたくないの、俺がそう告げると、ネットゲで殲滅<sup>ウニシタジーニエ</sup>皇女の冠を戴く廃ゲーマーは「気を使ってもらいありがとうございます」と嬉しそうに笑う。

「では明日のイブに二人きりで。高級レストランとホテルの予約を」

その上すかざすスマートフォンをいじり検索し始めた。

やべえ。こいつに思い付きの交渉は自殺行為だっけ忘れてた。退職金を手にいれるまではとにかく耐えねえと。ばっくれるのはそれからだ。

俺は焦りまくって再訂正する。

「やっぱり今夜ギルドの皆とクリスマスを祝おう！ うんうん」

俺は無理やり荷物を半分奪い取り、先に立って歩き出した。これ以上変な要望だされるぐらいなら、ネットゲに浸かる相手を横目に眺めながらハバネロのチキンをかじってる方がマシだ。



要するにネトゲは猫にとっての猫じゃらしだからな。ストーカーがこつちに意識を集中してきたら怖すぎる。

斜め後ろを歩く佐鳥さんが、先輩ってば照れ屋さん。とか指で口元を押さえながらぼざいているが、もちろん聞こえやしないぜ。

佐鳥さんのアパートは2LDKなので、実際にはマンションといってもいいのかもしれない。

本人がアパートと言うので、俺もそれを訂正する気なんてないだけだ。

帰るなり玄関の上がり口に荷物を置いて、シャワー浴びるといつてバスルームに飛び込んだ佐鳥さんを、俺はほっというて居間へ入る。

6階の高さにあるこの部屋は、窓からの景色は悪くない。もともと山の傾斜地に建てたので、実際の高低差は下の道路と比較すれば10階ぐらいになる。夜の夜景というほどの煌びやかさは、住宅地にはありはしないが。

俺は窓を開けて、部屋のどこかこもった空気を冬の澄んだものに入れかえる。そして見たくは無かったが、あらためて部屋の方を振り返った。

「変わってねえ」

以前見舞いに来た時同様、脱ぎ散らかした服がソファに重なり、床に広げられたままの何十冊もの雑誌で足の踏み場も無い。

俺はコートを脱ぐと椅子に掛け、ダイニングテーブルの上に買ってきたチキンセットを避難させた。

ため息をつきながら雑誌を拾い始め、まとめて部屋の本棚へと立

てていく。その後は服をたたんでソファに置きなおした。

何故か台所にあった掃除機で簡単に部屋のホコリを吸い取ると、キッチンのシンクに置かれたままの食器類を洗っていく。

俺が大雑把ながら部屋の片付けを済ました頃、ようやく佐鳥さんはバスルームから出てきた。

可愛い花柄のひよこ模様のパジャマを着てバスタオルで髪をぬぐっている。部屋の変わりように気づいたのだろう、目を見開いて立ち止まった。

「先輩……」

まあ、感謝の言葉ぐらいはもらっても当然だろうな。俺が手を上げて、気にスンナ、と言いかけるのをさえぎってひよこが叫ぶ。

「読みかけの雑誌ばかりだったのにつ」

俺は笑いながら迷うことなく頭上に拳を落した。

入れ替わりにトイレを借りた俺が部屋に戻ると、風呂上りにも関わらずメイク完了、まつ毛もエクステで長い佐鳥さんは、髪をドライヤーで乾かしながら時間を気にしている。オンラインゲームの祭りの時間が近づいているらしい。

「先輩も久しぶりにどうですか？ 昔はこのネトゲやってたんでしよう？」

ひよこ廃人め、うるさいよ。コイツが入社した時、ネトゲネタにあっさり付いてきた事で看破されて以来、ことあるごとに復帰を勧

めてくるのも、俺が佐鳥さんを苦手な理由だ。飽きたモノを食えと言われるのが苦痛な事だと、飽きてないヤツは気づかないんだよな。

「もう引退したんだよ」

俺のすげない返事はスルーして、乾いた髪をまとめ、その上から金髪のウィッグをかぶりだした。長く縦ロールまでついたこのカツラ姿に、パジャマの上からピンクのカーディガンを羽織ると、準備完了とばかりPCについた小型カメラで自分の顔を撮り、ボイチャのヘッドフォンを装着する。

「今夜はカメラは静止画にします。先輩が映っちゃうとアレなんで」

ただ、ボイチャで音入らない様に、先輩も声は控えてください、とお願いされる。

俺にとっては願ったり叶ったりだ。これなら佐鳥さんがネットゲ中は、会話の必要がない。ただ端っこで鶏の足を食べてればいいんだからな。ギルドメンバー万歳だぜ。

あわてんぼうのさんたくろつす

ギルド構成員とのクリスマスイベントは、それからしばらくして始まった。

佐鳥さんがゲームにログインした時には、そのギルドの根城はメンバーで溢れかえっていた。

ファンタジー系に相応しく、色んな時代や世界をモチーフにしたキャラクターが、色彩豊かな衣裳や装備で城の大ホールを闊歩している。

佐鳥さんは、絨毯の敷かれた50インチのモニター前に陣取って、ガラスのローテーブル上の無線キーボードでボディランゲージコマンドを打ち込みつつ、音声チャットを楽しんでいる。

少し離れたダイニングテーブルの椅子に座り、そんな廃人の様子を眺めながら、二本目のチキンの辛さに根を上げ、冷蔵庫のコーラで舌を冷やす俺。さすがハバネロソース。口内での暴君ぶりは伊達じゃねえ。

ストーカーに迫られるという悲惨なシミュレーションも何百回とした俺としては、この展開は特に不満も無い。それどころか、今日も漫画喫茶で一晩明かすはずだったのだから、それに比べればずいぶんマシだろう。

「おとなしければ、害もないんだけどな」

俺のつぶやきが聞こえたのか、こちらを振り返るひよこに、そんなに手を振って、なんでもねえ、と示す。佐鳥さんのキャラのステータス画面にさっきの金髪姿が掲載されている。

中の人を明かすかどうかはプレイヤーの考え次第で、NOPI  
CTUREの表示ができる事は俺も知っている。

佐鳥さんはこのギルドでは大物の様だ。

でかいモニター画面ではひっきりなしに挨拶に来る人々で周りは  
ぎゅうぎゅうに囲まれている。このゲームも大きなギルドは城持ち  
を目指す。PVP系の多人数対戦ゲームとしては古いほうだと思う。

まあ、俺がやってた時よりはずいぶんレンダリングが秀麗な感じ  
になったもんだ。ただ、SNS的要素がシステム強化されてからは、  
ネットだけの関係ですまない場合もあって、その辺が俺の引退理由  
でもあったけどな。

「そうなの。最近ストーカーに悩まされてるの」

不意に聞こえた単語に、俺は我に帰る。向こうの声は聞こえない  
から、この発言は佐鳥さんだ。

ゲームキャラも金髪の女性なので、それに合わせた口調なのは分  
かるが、問題はその内容だったの。

「なんか、いつも見られている様な気がして気持ち悪いんだ」

おいおい。それって自分の事だろうが。俺の興味を引いた事に気  
づいたのか、小声になって話を続ける真性ストーカー。たまに笑い  
が混じるのがなんとなく腹が立つ。

俺は、知らんふりをしようと努めたが、どうしても気になって、  
ついに佐鳥さんの所へ近寄っていった。

「でも、会社の同僚だし、出来たら上手く付き合いたいんだけど、  
どうしたらいいのかな？」

……ああ、わかったよ。俺の心を読んでるんだな。だが、お前はもう同僚じゃねえからな。金さえもらったら、速攻バイバイだからな。

俺はいつの間にか佐鳥さんが被害者になっっているこの話題が気に入らなくて、もう一度離れようとした。

そこへ、ギルドの大物さんはメンバー皆にこう聞いた。

「じゃあ、もしそのストーカーさんが私を傷つけたら、皆はその人をどうするの？ コМПЛЕZ」

そう聞いた直後、文字チャットの画面が凄い速さで埋め尽くされた。どんどんスクロールしていつて、一文ずつ読むことなど不可能だ。

俺もその文字の川が意味する内容を理解した瞬間目をそらしたので、その後結構長いあいだ続いたらしい、俺と思われる人物への大量のコメントは見えていない。

ただ、網膜に入った単語の例はこんな感じ。

《KILL》 《リアルで》 《姫には俺達がついてる》

頼むから、やめてくれ。

あと、勝ったという表情で俺を見上げる廃人も、その顔ヤメロ！俺は後も見ず、急いで部屋から逃げ出した。

全速力で最寄のバス停まで走り、ちょうど来た駅前行きの便に飛び乗る。

佐鳥さんには悪いが、パジャマ姿では追ってこられないだろう。退職金は惜しいが、命には代えられん。あれが祭りの席のノリならいいが、あの時の佐鳥さんの後ろで流れる文字の奔流は、俺の生存本能に充分危機感を植えつけてくれた。

こえーよ。マジこえーよ。

俺はバスの座席に座り、これからどうすればいいのかと思いつながら、目を閉じた。

気がつくと、TVの画面が目に入った。ヘッドフォンからは朝の芸能ニュースが聞こえてくる。

どうも、ネットカフェでTVを見ながら寝てしまったらしい。

「ああ、へんな夢を見た」

俺は大きく背伸びをしてからだをほぐす。あちこちの骨がポキポキと音をたてている。リクライニングチェアでもベッドに比べれば、眠りにくいよな。

俺は漫画を書棚に返すと、席をたち精算のために、受付カウンタ―へと向かう。

精算のシートを出すと、綺麗な店員がレジを打ってくれる。夢にでてきた人によく似ている。ただ、夢とは違って、あんなに図々しくは無い。お釣りを渡す時も、はにかむような可愛い笑顔だ。

ああ、こんな店員さんと仲良くなりたくてあんな変な夢をみたのか。

そんな思いがばれないように極めて事務的に対応しながらも、俺は朝からいいものを見たど、ちよつとお得な気分て店をでた。

街はすでに活動を始めていた。年末進行で家に戻れず、漫画喫茶に泊り込みの日々ももうすぐ終わる。

今日はクリスマスイブだ。まあ、恋人も居ない俺はやる事もないし、納期の迫つた仕事をしてしまうだろうが。それでも週末は家に帰つて風呂にはいりたいもんだな。

「あのう……」

まあ、あの社長の使い方じゃ、その内皆ダウンするかもなあ。

「ちよつといいですか？」

その場合は、社長自身にがんばってもらうしかないけどな。

「熊原先輩！」

……他人の振りして現実逃避しても俺だよな。

苦い顔をしているに違いない俺が嫌々後ろを見ると、そこには、さっきのネットカフェの制服を着た佐鳥さんが立っていた。





もろびとこそりて

「佐鳥さん、なんであそこにいるわけ？」

俺は完全無視を決め込んだはずの亡霊が、朝も早よから現れたことに結構絶望していた。だいたい、この漫画喫茶は初めて入ったんだから、いくらなんでも佐鳥さんが知ってるわけねえんだ。

「先輩が部屋でトイレに行った隙に、コートのポケットを確認させていただきました」

いけしゃあしゃあとしたカフェ店員に、心底からがつくりとしつつ理解した。そういういや昨日の朝もらった割引券使ったもんな。行動の予測ばっちりだぜ、さすが俺のストーカーだ。

……嫌過ぎるがな！

「それで店に潜り込んだのか？」

ちよつとコメカミが痛くなってきたが、一応最後まで確認する。そうしないと離れてくれないのは経験済みなのだ。

佐鳥さんはぶんぶんとうなずきながら、事の顛末を話してくれた。

「まあ、店長さんに一生懸命お願いしたら、見習いという事で入れてくれました。監視カメラでみる先輩の寝顔、可愛かったなあ」

外見武器に無理押ししたらしいが、嘘付け。そこまで見られないはずだ。いやでもコイツの事だから、監視カメラの位置さえ直しかねんか。

佐鳥さんはほわほわとした顔で白い息をはきながら続ける。

「よだれが子供みたいで、きゅんとしちゃいました」

絶対覗いてたな。このストーカーが。

「まあ、バイト先決まってよかったな」

俺が放り投げるように言うと、こいつは嫌な話を付け加える。

「熊原先輩がああの漫画喫茶を根城にするなら。本気でバイトしようかな」

勝手にしろ。俺は金輪際あそこにはいかねえ。だが、そんな正直に言うほど俺も経験不足ではないつもりだ。

「楽しそうな仕事でよかったな」

さりげなく、その仕事に就いて俺と離れてくれるように誘導する。

「でも先輩が仕事見つけたら、私も先輩と同じ先に再就職しますよ」

佐鳥さんの当たり前前の様な宣言に、俺は背筋が寒くなりながらとぼける。

「そんな上手くいくかよ」

「上手くいきますって」

コイツの目はマジだ。やっぱやべえ。とにかく距離をおかんと、

俺の精神衛生上とてつもなく悪い。

「とにかくついてくんな」

すげなく振り切ろうとする俺に佐鳥さんはすかさず切り込んできた。

「退職金の話はどうします?」

「……くっそ」

一晩空けると、やはり金への執着が捨てられない俺がいた。衣食足りて礼節を知るって事だよ。いや違うか。ああ、背に腹は変えられないって事だ。そうそうこれだよ。チクショウ!

「じゃあ十二時にハロワ向かいのミスドで」

「なんでハローワーク行くなって分かってんだよ!」

俺の叫びを無視しながらなんだかガサゴソと音を立てる。聞けつつの。

「先輩?」

「なんだよ」

佐鳥さんは手に持った袋からグレーのマフラーを取り出した。ブランド品なのは俺も一緒に見ていたから知っている。

「昨日最後までパーティー一緒にする約束破りましたよね。だからこ

れを受け取ってください。それが約束破った罰です」

どこか必死の目で見あげる佐鳥さん。最初はジト目だった俺だが、涙に潤む那智黒石の瞳に根負けしてそれを首に巻いた。相手が巻こうとしたが、それは断固拒否したぜ。

「じゃあな」

俺はハロワに向かって怒りながら去っていく。ハロワは二駅先だから、まずは駅に行く必要がある。

駅で切符を買っていると、隣の男とぶつかりそうになった。そいつはスマホに入力していたので、俺に気づかなかったみたいだ。

俺が頭を下げると、そいつも慌てたように頭を下げ返して去っていった。

ホームへと上がって、電車を待つ。並ぶ人達の何人かは携帯をいじっている。

あまり熱心になって、ホームから落ちたりするなよ。そんな気分とともに見ていると、思わず目があってしまい、向こうは顔をそらした。

電車がホームに入ってきたので俺は比較的列の少ない3両目に乗り込む。

流石に座ることは無理だったので、ドアの近くで外の景色を見ていた。

まったく、佐鳥さんはなんとかならんもんか。正直気持ち悪いが、まあ、いいところもあるのは知っている。でもやっぱりむかつくんだよな。

俺は貰ったマフラーを一旦はずして、それを見つめた。結局はもう一度巻きつけることにしたけどな。

ずいぶんと薄い織地の割りに暖かい肌触りは、俺が寒がりなくせに厚着が嫌いな事を知っているからだろう。

「まあ、外は寒いしな」

俺はうそぶくと、今から向かうハローワークに良い仕事がある事を願った。

私は「本日も情報提供よろしく」とツイートしたとたん、スマホへどんどん追加されていく返信に気を良くしていた。

《姫、対象者発見なう》

《敵は駅前で乗車券げと》

《3両目に乗るまで確認致しました、  
皇女殿下》

ハー・インベリアル・ハインス

《車内から。窓の外を眺めてぼんやりしている様子っす》

《同じく3両目。マフラーはずす。ため息をついてまた巻いた》

私は頬が熱くなりながらビルで遮られた電車の行く先を眺め、ス  
マホをぎゅっと握りしめる。

「先輩ってば照れ屋なんだから」

先輩、良い仕事見つかるといいな。きつとサントさんが叶えてく  
れるよね。なんといつてもクリスマスだもんね。

完

## もろびとこそりて（後書き）

第2シーズンの「しがつばか。熊原と佐鳥さん」も開始しました。別作品「ぎりちよこ。鈴木と奥さん」の鈴木は、熊原達の元同僚です。

どちらもお読み頂ければ幸いです^^



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5531p/>

---

めりくり。熊原と佐鳥さん

2011年2月25日07時20分発行